

未来への伝承

土製耳飾とは、土器と同じように粘土で形を作り、焼いて仕上げた、縄文時代の耳飾りです(写真①)。どうして耳飾りと分かったかという点、縄文時代の土人形、土偶に耳飾りの表現があるためです。

写真②、③をご覧ください。顔の脇には、目や口と同じような模様が施されており、裏側にも同心円状の模様が見られます。かなりデフォルメされていますが、表裏に同じような丸い模様があることから、単に耳を表現したのではなく、耳たぶにはめた土製耳飾を表現していると考えられます。

土製耳飾の付け方は今でいうピアスと同じで、まず木や骨で作った針で耳たぶに穴を開けます。その穴に小さな耳飾りをはめ込み、だんだんと大きいものに付け替えていきます。土製耳飾の直径は小さいもので1センチ程度、最大で9センチもあり、これをはめ込んだ縄文人の耳たぶには相当大きな穴が開いていたようです。耳飾りの装着には身体を傷つける必要があることから、単なるアクセサリではなく、その装着は一種の通過儀礼であったと考えられています。土製耳飾は縄文時代のなかでも、特に後晩期の遺跡で多く出土します。今回ご紹介する資料は、市

縄文ピアス

かんだっだいら

— 神立平遺跡の土製耳飾 —

どせいみみかざり

内神立町の神立平遺跡から出土したものです。

神立平遺跡出土の土製耳飾(写真①)は今から3000年ほど前の縄文時代晩期前半の竪穴住居跡から見つかりました。直径約5センチ、高さ約2センチで、耳に引っかかるように側面は少しくびれています。写真の裏側は白のように凹んでおり、これは軽量化のためかもしれません。土製耳飾の中では大きいほうで、身につけたのはある程度成長した人物だったと考えられます。また、写真②、③の土偶も同じ住居跡から出土したものです。土偶の多くが女性を表していること、その土偶に耳飾りの表現があること、さらに、耳飾りの装着が一種の通過儀礼だった可能性などから想像すると、神立平遺跡の耳飾りを装着したのは、成人した女性だったのかもしれない。

今回ご紹介した資料は、現在開催中の特別展「上高津貝塚のころ—縄文後晩期 円熟の技と美—」にて展示中です。ぜひ、上高津貝塚ふるさと歴史の広場に足を運んでみてください。

☎ 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
(0826・7111)



▲写真① 土製耳飾



▲写真③ 土偶(裏)

▲写真② 土偶(表)